女子教科國文法教本 下卷

3759
Ni19
資料室

42133
教科書文庫
4
815
42-1912
20000
49036

資料室
375.9
Ni19

大正元年十二月十二日
文部省檢定濟
（高等女學校國語科用）

女子教科國文法教本

西岡嘉藏著

東京 明治書院

廣島大學 教 44636 輸 文

女子教科

國文法教本下卷目次

第一章 文（主語・述語）……一
第二章 客語（動詞の性）……三
第三章 動詞と助動詞との連續……六
第一節 動詞と相の助動詞との連續……八
第二節 動詞と時の助動詞との連續……一四
第四章 助動詞の段……一六
第五章 助動詞と助動詞との連續……一九
第一節 完了助動詞と過去・未來の助動詞との連續……二三
第二節 完了助動詞と推量助動詞との連續……二四
第六章 係結……二六

第七章　文の主要成分……二九
第一節　補語……二九
第二節　準體言……三一
第八章　文の附屬成分……三三
第一節　修飾語……三三
第二節　修飾語の修飾……三五
第九章　成分の位置及び省略……三七
第一節　成分の位置……三七
第二節　成分の省略……三八
第十章　成分と助詞との關係……四〇
第一節　體言に附屬する助詞……四一
第二節　種々の語に附屬する助詞……四四
第十一章　句……四八

第一節　附屬句……四八
第二節　獨立句……五一
第十二章　副詞句と接續助詞との關係……五二
第十三章　文の構成上の種類……五六
第一節　單文……五六
第二節　複文……五八
第三節　重文……六一
第十四章　文の性質上の種類と係結法……六三
第一節　叙述文……六四
第二節　疑問文……六六
第三節　命令文……六八
第四節　感歎文……六九
第十五章　助詞の分類……七一

第十六章　文の解剖……十四
附　錄
助動詞活用表
口語助動詞活用表

下卷目次終

帝國大學圖書之印

女子教科

國文法教本下卷

西岡嘉藏著

第一章　文（主語　述語）

花咲く。

山高し。

右の如く、二個以上の單語を連ねて、完全なる思想を表したるものを文或は文章といふ。而して、右の「花」「山」は思想の主たる事物を表す語にして、文の題目たるものなり。「咲く」「高し」は、題目たる事物が如何にしたるか、又は如何にあるかを說述したるものなり。前者を主語といひ、後者を

述語といふ。

完全なる文には、少くとも主語と述語とを具備せざるべからず。若し、二者その一を缺くときは、如何に長くとも文といふべからず。故に、この二つは、文を構成する要素なり。而して、主語となるべき語は體言にして、述語となるべき語は用言なり。但、主語及び述語には、種々の助詞及び助動詞などの添へること多し。

左の文につきて主語と述語とを指示せよ。

一、我が軍は勝ちたり。

二、かしこに白帆見ゆ。

三、庭の櫻いと美しく咲きぬ。

四、父上には歸宅せられしか。

五、新校舍も最早落成せむ。

第二章　客語（動詞の性）

文は主語と述語とより成るものなれど、これのみにては、意味の通ぜざることあり。例へば、

少女　折る。　　賴朝　殺す。

の如きは、何を折るか、誰を殺すか、明ならず。必ず、折る　殺す　といふ動作を受くる目的物なかるべからず。

少女　花を折る。　　賴朝　義經を殺す。

として、意義明に完全なる文となる。この　花　義經　の如き語は、動作を受くる客體なれば、これを客語といふ。かく、文章に客語を要するものと要せざるものとあるは、全く述

語たる動詞の性質によるなり。

一、花　散る。　鳥　花をちらす。

二、月　見ゆ。　老人　月を見る。

三、鉛筆　折る。　少女　花を折る。

散る　見ゆ　折る　の如き動作は、動作者、卽、主語のみにて成立するものなり。ちらす　見る　折る　の如きは、その動作を受くる目的物なければ成立せざるものなり。前者は他物に及ぼさざる動作なれば、自動性の動作といひ、後者は他物に及ぼす動作なれば、他動性の動作といふ。自動性の動作を表す動詞を自動詞と稱し、他動性の動作を表す動詞を他動詞と稱す。されば、他動詞が文の述語たる場合には、常に客語を要す。客語として用ひらるゝ語は、體言にして、且、

を　といふ助詞を伴ふを常とす。但、この花折るべからず　月見る人あり　などの如く、を　を略することあり。

左の文章中より自動詞と他動詞とをとり出せ。

一、しきしまの大和心を人とはば朝日ににほふ山ざくら花の歌は、よく我が國民性を云ひあらはせるものなり。

二、螢の光窓の雪、文讀む月日重ねつつ、いつしか年もすぎの戸を、あけてぞ今朝は別れ行く。

すべて文を作る場合に、自然の動作には自動詞を用ひ、他動の動作には他動詞を用ふるやう注意すべし。例へば、

社内に鳥居立ちたり。　社内に鳥居を立てたり。

この樹の枝は折れむ。　この樹の枝を折らむ。

塵積りて山となる。　塵を積みて山をなす。
身修まりて家齊ふ。　身を修めて家を齊ふ。

の如し。自他を區別するの必要は、この用法を誤らぬためなり。

次の文に誤あらば正せ。

一、子を育つに道あり。

二、溪に沿へ、崖につたひて行く。

三、お花は小學校の課程を終りたり。

四、猶、水を四角なる器に入りて、方形となるが如し。

五、勇悍なる軍人を沈没せしは、惜みても猶餘りあり。

第三章　動詞と助動詞との連續

助動詞の種類、並に動詞との連續法は、既にこれを說きたるが、今、便宜上、一括してこれを表示せむ。

將然段に連るもの	る　らる(所相)	す　さす	しむ(使役相)	ず　ざり　じ(打消)	む(未來)　まし(推量)
連用段に連るもの	つ　ぬ	たり　き	けり(過去)	けむ(推量)	たし(希望)
終止段に連るもの	らむ	べし	らし(推量)	まじ(打消)	なり(詠嘆)
連體段に連るもの	なり(指定)	ごとし(比況)			

右の中にて、動詞との連續上、特に注意すべきもののみを左に說かむ。

第一節　動詞と相の助動詞との連續

一、勢相

所相助動詞の　る　らる　は、動詞の將然段に連りて、他より動作を受くる意を表す。例へば、

義朝、爲朝に射らる。

甲、乙に殺さる。

の如し。然るに、

余は一日に十里の道も歩まる。（歩まれる）

彼は六尺の屏風も飛び越えらる。（越えられる）

の如く用ひられたる　らる　は、自己の力にてよく爲

し得る意なり。これを勢相といふ。

過ぎにし事のみ忍ばる。（忍ばれる）

行く末の事が案ぜらる。（案ぜられる）

の如きも、動作の自然に起りてとゞめられぬが如くいへるものにて、尙勢相なりとす。

勢相を表す助動詞、及びその連續法は、所相に同じ。

【注意】1. 所相と勢相とは、形同一なれど、所相には動作者たる（乙に、爲朝になどの如く）標準の語を要し、勢相にはこれを要せず。而して所相の標準の語に　に　を添ふる代りに、近來往々　のために　の語を添ふ。

2. サ行變格の將然段に　らる　を連ぬる時は　せらる　となる。されば　罪せらる　勉强せらる　などいふが當然なるを、近來これを約めて　罪さる　勉强さる　といふに至れり。

3. 口語の四段活用の將然段に勢相助動詞れる が附く時は、約りてエ列の音となる。例へば 讀まれる が 讀める となり、書かれる が 書ける となるが如き是なり。

二、敬相

使役助動詞 す さす しむ を動詞の將然段に連ぬるときは、他を使役して動作を爲さしむる意となる。例、

先生、生徒に本を讀ます。

主人、乳母に子を育てさす。

母は娘に單衣を縫はしむ。

【注意】1. 使役相の被役者に に を添ふる代りに、近來往々 をして の語を添ふ。

2. 上一段活用の將然段に しむ を連ぬるときは 著しむ 見しむ

似しむ となるは當然なるを、往々誤りて 著せしむ 見せしむ 似せしむ などいふ。注意すべし。但、これらの語は、サ行下二段にも活用すれば、その將然段に しむ を連ねて、著せしむ 見せしむ 似せしむ などいふは固より誤にあらず。

3. ア行下二段動詞の 得 に しむ を連ぬる場合に限り、得しむ とも 得せしむ とも使用す。

公爵夫人は歌を好ませらる。

皇后陛下こゝに行啓せさせ給ふ。

の如く用ひられたる せ させ は、他の動作を尊敬して いふ意となる。これと同じく、所相助動詞の る らる も、亦尊敬の意に用ひらるゝことあり。

夫人は馬車に乘らる。(乘られる)

母上は大に滿足せらる。（滿足せられる）

の如きこれなり。これを敬相といふ。

敬相を表す助動詞、及びその連續法は、所相及び使役相に等し。

【注意】1. 古文には、使役相の　しむ　も敬相に用ひたれども、今は多く用ひず。

2. 所相及び使役相と敬相とは、同一の形なれば、文章上の關係より識別すべし但、使役の助動詞を敬相に用ふる場合は、下に　らる　又は　給ふ　の語を添ふること多し。

3. 口語の敬相助動詞は、右の　れる　られる　の外、なさる　くださる　あそばす　いたす　ます　等種々あり。

以上述べたる所と上卷にて說きたる所とを合せて、助動詞の相を表示すれば左の如し。

能相	所相	勢相	使役相	敬相
讀む	讀まる（讀まれる）	讀まる	讀ま（す）（しむ）	讀ま（る）（す）
受く	受けらる（受けられる）	受けらる	受け（さす）（しむ）	受け（らる）（さす）
		（受けられる）	（受けさせる）	（受けられる）

次の文につきて相の助動詞を區別し、且、口語なるは文語に改めよ。

一、朝顏に釣瓶とられてもらひ水。

二、知事が出席されて演說された。

三、何某に射られて失せられ給ひき。

四、針が落ちたから妹をして見させる。

五、琴ひくと聞かせられてひかしめ給ふ。

六、かくたやすき問題は誰にも解さる。

第二節　動詞と時の助動詞との連續

上卷に於て、過去助動詞として擧げたる　つ　ぬ　たり　り　き　けり　の六つは、その意に於て多少の差異あり、卽、き　けり　の二つは、全く過去の意を示すものなれども、つ　ぬ　たり　り　の四つは、過去に於て爲し初めたる動作が現在まさに終りたる意を示す。故にこれを現在完了、或は單に完了の助動詞といふ。完了の助動詞は時として、過去に起りたる動作が現在まで繼續する意を表すに用ひらる。例へば　小兒はすや〳〵と眠れり（眠つて居る）　の如き是なり。

【注意】1. き（し・しか）が變格カ行・サ行に連續する法は、稍異例なり。卽、カ變には

將然段・連用段に　し・しか　と續きて、き　は何れにも續かず。サ變には、將然段に　し・しか　と續きて、き　は續かず。又その連用段に　き　のみ續きて、し・しか　は續かず。左の表を見て知るべし。

	將然段	連用段
カ變（來）	こ（し・しか）	き（し・しか）

	將然段	連用段
サ變（爲）	せ（し・しか）	し（き）

2. き・し・しか　は、右の外、すべての動詞の連用段に連るものなれば、サ行四段の動詞に連りては、爲し　殺し　となり、サ行下二段の動詞に連りては、載せし　任せし　といひ、サ行變格に連りては、罪せし　勉强せし　などいふが當然なり。さるに、近來サ行四段に連續する場合にも　殺せし　爲せし　など用ふるに至れり。次の文に誤あらば正せ。

一、庭前に梅を植ゑり。

二、私は小學校にて、かの先生に教を受けり。

三、一且約しし事は輕々しく變ずべからず。

四、母が心を盡せしかひありて、さしもの病氣も直に癒へぬ。

五、博士は友人の勸告に任して、其の發見し丶ものを更に實驗されたりし。

第四章　助動詞の段

助動詞も亦動詞の如く、語尾の變化によりて、一々その用法を異にせり。今 る らる につきて説明せむ。

	第一變化	第二變化	第三變化	第四變化	第五變化	第六變化
打タ	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
捨テ	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

第一變化　打たれむ　捨てられば困らむ　などのれ　られ　は、未定の意を表す。これ將然段なり。

第二變化　打たれ行く　捨てられやすし　などのれ　られ　は、用言に連る故に連用段なり。

第三變化　犬打たる　子供捨てらる　などのる　らる　は、文意の終止する場合に用ふる故に終止段なり。

第四變化　打たる丶犬　捨てらる丶御身　などのる　らる丶　は、體言に連る故に連體段なり。

第五變化　打たるれども痛からず　捨てらるれば困る　などの　るれ　らるれ　は、その條件の已に定まれることを表す。これ已然段なり。

第六變化　打たれよ　捨てられよ　などの如く、命令の意を表す。これ命令段なり。

この命令段は、下二段及びナ行變格の活用に等しき助動詞の外にはなし而して下二段活用に等しき助動詞の命令に用ひらるゝ場合は、よを添ふること、下二段活用の動詞に同じ。

なほ、すべての助動詞につきては、卷末の表にて知るべし。

次の文章中にある動詞・助動詞の活用と段とを指示せよ。

一、燈火消えなむ。

二、早く行きねかし。　人こそ知らね。

三、奇樹・異草、名も知らず目なれぬものいと多し。

四、これより下山せむこと生涯の遺憾なるべし。

五、吾等の入學せしは、昨日の如く思ひしが、今は第三年級になりぬ。

第五章　助動詞と助動詞との連續

讀みにき　讀ませらる　などの如く、助動詞は必要に應じて數箇を連結せしめ、以て動詞の意を補助する用をなす。かく、多くの助動詞が動詞に連續する場合も、尚、これを一つの動詞と見做し、單純なる動詞と同じく、將然・連用以下の各段を有するものとす。そは、最後にある助動詞の活用によりてこれを定むるものなり。卽、左の如し。

將然段	連用段	終止段	連體段	已然段	命令段
讀ませられ		讀み	讀みに	讀みにし	讀みにしか
讀ませられ	讀ませ	讀ませらる	讀ませらるる	讀ませらるれ	讀ませられよ

助動詞が他の助動詞に連結する方法は、動詞に連結する方法に等し。卽、動詞の將然段に連る助動詞は、亦助動詞の將然段に連り、動詞の連用段に連る助動詞は、亦助動詞の連用段に連る。他の各段、皆これに同じ(但、動詞の終止段に連る助動詞は、ラ行變格と同一活用の助動詞に連續するときは、その連體段に連る。)但、助動詞の中には、性質上相互連續せざるものあれば、よく試みてこれを知るべし。

助動詞相互の連續法を例示せむに、讀む といふ動詞に、助動詞 る たり らむ を連ぬとせよ。る は將然段に連るべき助動詞なれば、讀む の將然段 讀ま に連ねて 讀まる とす。次に、たり は連用段に連るべき助動詞なれば、讀まる の連用段 讀まれ に連ねて、讀まれたり とす。次に らむ は終止段に連る助動詞なれど、

たり の如きラ變と同一活用の語に限り、その連體段に連るべきものなれば、讀まれたり の連體段 讀まれたる に連ねて、讀まれたらむ とす。この方法に從ひて助動詞は意義の許す限り、幾箇にても連續するを得べし。而して、かく、連續したる語も、助動詞の意義を考へて、容易にその意を悟り得べし。例へば、讀まれ は所相にて、たる は過去、らむ は推量の意なれば、所相の過去の推量、卽、讀まれたであらう の意なるを知り得べし。

左の動詞と助動詞と順次に連續せしめ、且、その意義を解け。

一、勉强す ざり む

二、書く たり べし

三、受く られ つ けり

第一節　完了助動詞と過去・未來の助動詞との連續

完了助動詞中の　つ　ぬ　たり　に、過去助動詞の　き　けり　を連結せしむるときは、過去に於ける動作が比較的以前に成就せし意を表す。卽、左の如し。

て——てき　てけり
讀み　に——にき　にけり
たり——たりき　たりけり

以上の如きを過去完了といふ。又未來に於て動作の成就せむ意を表すには、完了助動詞　つ　ぬ　たり　に、未來助

動詞の　む　を連結せしめ、これを動詞の連用段に連ぬるものとす。卽、左の如し。

て——てむ
讀み　な——なむ
たら——たらむ

以上の如きを未來完了といふ。未來完了は時として、動作の起りは過去に屬すれども、その結果の分明ならぬとき、これを推量していふ意にも用ひらる。例へは　かの船は沈没したらむ　の如き是なり。

現在・過去・未來の三つに各完了の時を合せて、時を表す方法に左の六種あるを知るべし。

	尋常の時	完了の時
現在	讀む	讀み（つ・ぬ・たり）
過去	讀み（き・けり）	讀み（て（けり）・に（けり）・たり（けり））
未來	讀まむ	讀み（てむ・なむ・たらむ）

【注意】口語にては、現在完了・過去・過去完了の區別なく、何れも「た」を用ひ、又未來と未來完了との區別なく「う」又は「よう」を用ふ。

第二節　完了助動詞と推量助動詞との連續

推量法に現在・過去・未來の別あることは、上卷に於てこれを說きたり。卽、「らむ」「べし」「らし」の三つは、現在の事實を推量する意にて、「けむ」は過去の推量、「まし」は未來の推量なり。これに完了の助動詞を添ふるときは、推量法に左の六種の表し方あるを知るべし。

	尋常の推量	完了の推量
現在	讀む（らむ・べし・らし）	讀み（つ（らむ・べし・らし）・ぬ……・たる……）
過去	讀みけむ	讀み（て（けむ・にけむ・たりけむ））
未來	讀まましし	讀み（てまし・なまし・たらまし）

【注意】1. 推量助動詞は終止段に連るもの多し。（但、ラ行變格に限り、その連體段

に連る。)然るに、口語の動詞にありては、終止段と連體段との形同じきを以て、文語にも往々誤りて、推量助動詞を連體段に連ぬることあり。例へば　起くべし　載すらむ　勉強すらし　勉むべし　といふべきを、起くるべし　載するらむ　勉強するらし　勉むるべし　とするの類是なり。注意すべし。

2. べし　は本來、指定の助動詞なれども、推量の意にも用ひらる。しかのみならず、明朝登校すべし　道路の左側を通行すべし　などの如く、命令の意に用ひられ、又　貞女の鑑といふべし　嶮しき山も登るべし　などの如く、勢相を表すにも用ひらる。

第六章　係結

水流る。　花は咲かず。

鳥も鳴きぬ。

右の如く、文の述語は、終止段を以て結ぶを常とすれども、上に　ぞ　なむ　や　か　の助詞あるときは、

水ぞ流るゝ。　花なむ咲かぬ。

鳥や鳴きぬる。　世の中は何か常なる。

の如く、連體段にて結び、上に　こそ　の助詞あるときは、

水こそ流るれ。　花こそ咲かね。

の如く、已然段にて結ぶものとす。この　ぞ　なむ　や　か　こそ　の如き助詞を係詞といひ、係詞に應じて下を結ぶ語を稱して結詞といひ、合せて係結といふ。

係結は種々ある故に、これを區別せむがため、一をぞ・なむ・や・かの係、ぞ・なむ・や・かの結といひ、一をこその係、こその結と

いふ。

花は咲きたりとぞ。(いふ)　名譽なる事になむ。(ある)

花は咲きしにや。(あらむ)　壽を以て終りきとか。(いふ)

女子の龜鑑にこそ。(あれ)

かゝる例は、普通の文章に多し。こは何れも括弧内の如き結詞を略せるものなれば、その場合により適當なる語を補ひみるべし。

【注意】係結の法は口語には存せず。

次の文章につきて係結の誤を正し、且、結詞の略せるはこれを補へ。

一、行きても見たき心地ぞせらる。

二、そは以ての外の一大事にこそ候はむ。

三、彼は終に先非を悔いたりとなむ。

四、見る物、聞く物、一として樂しからぬはあらざりし。

五、ある人の月なむ面白しと云へるに、また一人、露ぞ哀なりと云ひしこそ面白かりし。

第七章　文の主要成分

第一節　補語

他動詞が文の述語たるときは、客語を要することは、既にこれを說きたり。然るに、

子　母に似る。　湯　水となる。

の如き文にありては、自動詞が述語となるものなれど、母に　水と　などの語を補ひて、述語の意の足らざるを補足せざれば、完全なる文とならず。かゝる語を稱して補語とい

ふ。

父長子に財産を讓る。彼は水を氷となす。

右の如く、他動詞が述語たる場合にも、主語・客語の外、尙、補語を要することあり。

義經　賴朝に殺さる、　賴朝　義經に平氏を討たしむ。

右の如く、所相又は使役相の場合には、主動者又は被役者を補語として用ふるものとす。

甲は乙に等し。　紅葉は花より美し。

右の如く、形容詞が述語たる場合にも、補語を要することあり。

補語として用ひらるゝ語は體言にして、に　と　等の

助詞を伴ふを常とす。

第二節　準體言

主語・客語及び補語は、何れも體言(體言に伴ふ助詞をも含む)より成る。然れども、

親に別るゝは悲し。　教ふるは學ぶよりかたし。

菊は白きをこそ愛すれ。　雪は降るをなむ見るべき。

學は勉むるに成る。　言はぬは言ふにまさる。

の如く、用言を主語・客語・補語として用ふることあり。こは用言を體言の如く用ひたるものにて、(口語の　のは　のを　のに　などに當る)これを準體言といふ。準體言として用ひらるゝものは、用言の連體段なり。

紫式部は名媛なり　汝は汝たり、我は我たり。

容貌花の如し。

述語が用言たるは、普通なれども、右の如く、體言の下に助動詞　なり　たり　如し　等の添ひて述語となる事あり。

かゝる場合には、上にある體言は、補語と見るべきものなれど、叙述の主要部分をなす故に、下の　なり　たり　如し　と合せて述語と見做す。

以上の主語・客語・補語及び述語は、文を構成する主要なる部分なれば、これを文の主要成分といふ。

左の文を各成分に分解せよ。

一、母子に泣かる。

二、落花雪に似たり

三、政宗使節を羅馬に遣はす。

四、千金の子は盗賊に死せず。

五、天皇位を皇太子に讓り給ふ。

第八章　文の附屬成分

第一節　修飾語

美しき花　多く咲きぬ。

右の文に於ける主語は　花　にして、述語は　咲きぬ　なり。而して　美しき　多く　は、何れも形容詞なれども、多く　は、述語たる用言を限定せる故に副詞として用ひられ、美しき　は、主語たる體言を形容せる故に純然たる形容詞なり。かくの如く、文の主要成分を形容限定する語を修

飾語といふ。而して文中の體言を形容する語を形容的修飾語といひ、用言を限定する語を副詞的修飾語といふ。

美しき花咲く。　勉強する人は成功すべし。

有益なる書を讀め。　彼は老いたる母に似たり。

猫はおのが主を忘る。　地理と歴史との試驗を受く。

形容的修飾語は用言の連體段、及び　の　が　の助詞(の)に連結せられたる他の助詞をも含む)を伴へる體言なり。

花いと美し。　余は久しく君を待つ。

鳥空を飛ぶ。　櫻花爛漫と咲く。

余は六時に出立して道を南へとる。

彼は東京より青森まで行く。

豐公は尾張國中村にて生れたり。

四歳にて字を習ひ六歳にして歌をよむ。

副詞的修飾語は副詞、又は　を・と・に・へ・より・から・まで・にて・にして　等の助詞を伴へる體言なり。この種の修飾語は、その下にある助詞を省略することあり。例へば、

余は六時出立す。　四歳字を習ひ、六歳歌をよむ。

の類是なり。

第二節　修飾語の修飾

修飾語は更に他の修飾語を加ふることあり。例、

梅の花、庭に咲きたり。

美しき梅の花、我が庭に咲きたり。

甚美しき梅の花、いと面白く我が庭に咲きたり。

かくして、文は次第に複雜となる。但、かゝる場合にも、體言を修飾するは形容的修飾語にして、用言又は副詞を修飾するは副詞的修飾語なり。

修飾語は文を構成する一部分なれども、主要なるものにあらざれば、これを稱して附屬成分といふ。

主語とその修飾語とを合せて、文の主部といひ、述語と客語・補語と、それらの修飾語とを合せて述部といふ。

左の文章中の主要成分と附屬成分とを區別せよ。

一、林の鳥しば〳〵鳴く。

二、彼はよく勉強する人なり。

三、妹は美しく咲きたる花を折りたり。

四、われらの學校の建物は甚堅牢なり

五、私は時々故郷の妹に面白い本を送つてやります。

第九章　成分の位置及び省略

第一節　成分の位置

各種の成分相合して、一文を構成するには、その位置自ら一定の順序あり。

一、主語は文の首位にありて、述語は末位にあり。

二、修飾語は修飾せらるゝ語の上位にあり。

三、客語及び補語は、主語と述語との中間にあり。但、一文中にこの二つある時は、何れを上位に置くとも可なり。

以上は普通の順序なれども、文意の緩急・誦讀の適否等に

よりて、これを顚倒することあり。その例、左の如し。

一、今や咲くらむ山吹の花。

二、涙を流して彼は語りぬ。

三、瞥見す、大魚の波間に踴るを。

四、まどかにめぐれよ、やよ子供。

五、如かず、潔くわが身を捨てむには。

六、優等生に校長は賞品を授與したり。

七、そんなことをあなたは誰れにお聞きでした。

第二節　成分の省略

文の成分は、時として、甚分明なる場合、又は重複の煩ある場合などは、これを省略することあり。例へば、

(君は)今日御在宅に候ふや。

(余は)明日も學校に行かむ。

(何人も)此處を通行すべからず。

の如きは、主語を略せるなり。わが國文には、主語の省略甚多し。

伏して希くは御購求あらむことを。(乞ふ)

母に逢はざりしは今も猶口惜しくなむ。(ある)

さゞれ石の巖となりて苔のむすまで。(榮えむ)

の如きは、述語を略せるなり。

琴を習へる人は早く(琴を)ひき給へ。

妹よ、この簪を(汝に)與へむ。

梶原、(佐々木に)たばかられぬとや思ひけむ、續いて(馬を)打

入れたり。

の如きは、客語又は補語を省きたるものなり。

左の文につきて省略せる成分を補へ。

一、余は門外にて待たむ。

二、花は櫻木、人は武士。

三、木の枝を折るべからず。

四、いつ御出立ですか。ハイ今晩の六時。

五、いざさらば雪見にころぶところまで。

第十章　成分と助詞との關係

以上說く所により、助詞には、主語・客語等の如き體言に附屬するものと、文の各成分、卽ち種々の語に附屬するものと

あるを知るべし。今、左にその大略を述べむ。

第一節　體言に附屬する助詞（後置助詞）

一、花が咲く　　秋風の吹く

君が代　　わが筆　　櫻の花　　犬の子

右の　が　の　の二つは、動作を起す事物を示す場合には、主語に附屬し、體言につきて下の語を修飾する場合には、形容的修飾語を作るものなり。

【注意】主語には必ずしも　が　の　を要せず。例へば　花咲く　秋風吹くの如き是なり。但、花の咲くを知る　余が知る所にあらず　などの如く、文を下に續くる場合には、の　が　を添ふるを常とす。

二、手袋を編む。　　鉛筆を削る。

右の　を　は、動作の目的たる事物を示す語なり。卽、文の客語に附屬して、他動詞につらなる語なり。然れども、

鳥が空を飛ぶ。　少女、野邊をあるく。

の如く用ひられたる　を　は、動作の行はるゝ場所を示し、副詞的修飾語となりて、下に自動詞の來るを常とす。

三、姉は母に似たり。　財産を長子に讓る。

毛蟲が蝶となる。　湯を水となす。

右の　に　と　は、動作の歸着する事物を示す語にして、文の補語に附屬するものなり。然れども、

舟に乘る。　富士山に登る。

右へ曲る。　東京へ赴く。

の如く用ひられたる　に　は、動作の行はるゝ位地を示し、

へ　は、動作の行はるゝ方向を示す語にして、共に副詞的修飾語を作るものなり。又、

月と花とを觀る。　學と德とを兼ぬ。

の如く用ひられたる　と　は、事物を並べ擧ぐるに用ふ。かゝる場合には、並べ擧ぐる語句毎に　と　を添ふるを本則とす。

柳と櫻㊂を植う　の如く　と　を省く事もあれど、賴朝、義仲と平氏とを討つ。賴朝義仲と平氏を討つ。の如きは、と　の有ると無きとによりて、その意味異なるが故に、これを省かむとする場合は、よく注意すべし。

四、東京より來る。　此處から舟に乘る。

東京まで行く。　日の暮るゝまで遊ぶ。

より　から　は、動作の起點を示し、　まで　は動作の終

點を示す語なり。何れも副詞的修飾語を作る。但、

紅葉は花より紅なり。　甲は乙より強し。

の如く用ひられたる　より　は、比較の意に用ひ、文の補語に附屬するものなり。

以上の助詞は、何れも體言の後に置かれて、そが文中に於ける關係を定むるものなれば、これを後置助詞といふ。

第二節　種々の語に附屬する助詞（指示助詞）

一、花は白く、葉は青し。　書を讀むはよし。

花も紅葉も美し。　字を書くも亦難し。

は　は事物の差別をいふに用ひ、も　は事物の竝列を示すに用ふ。

このは　は、花をば折る　爲ずばあらず　の如く、

を　ず　などの下に用ふる時は、常に濁音となる。

二、花ぞ散る。　雪なむ白き。

月こそ清けれ。

右の　ぞ　なむ　こそ　の三は、何れも多くの事物より唯一つを取出していふ意なり。この中　こそ　は最強く、ぞ　なむ　は　こそ　より稍輕き意なり。何れも係詞なるは既に述べたり。但、今授業中なるぞ　彼はたれぞ　の如く用ひられたる　ぞ　は、係詞にあらずして、たしかに指定する意なり。

神し知るべし　今しも歸れり　などの　し　といふ助詞も、亦たしかに指定して、語意を強むるものなり。

三、我のみ知る。　口にいふのみなり。
　母ばかり慕ふ。　唯思ふばかりなり。

のみ　ばかり　は、他に並ぶ事物なき意を表す。但、ばかり　は、口語の　ホド　又は　クラ井　の意にも用ふ。

二三年ばかり前なり。　及第者百人ばかりありき。

の如き是なり、

四、今しばしだにおはせよ。
　鳥にだに如かざるべけむや。
　草木すら春に遇ふ。　我が身すら容れられず。

右の　だに　と　すら　とは、輕き事物を擧げて重きを言外に知らする意にて、口語の　デモ　又は　デサヘ　などに當る。

五、我さへ嬉し。　雨の降るに風さへ吹く。

右の　さへ　は、一の事物ある上に、更に他の事物の添ひ加はる意にて、口語の　マデ　又は　ソノ上ニ　などに當る。

以上の助詞は、何れも體言にも用言にも附屬して、特にそのものを取出して指示する意なれば、これを指示助詞といふ。

左の文章中の助詞の種類と意義とを述べよ。

一、筧のしづくよりつゆ音なふものなし。
二、さゝれ石の巖となりて苔のむすまで。
三、某處へ行く途中甲と乙とに逢ひき。
四、二十日ばかりの月なん出でぬる。

五、人も學びて後にこそまことの德はあらはるれ。

左の口語を文語に改めよ。

一、右に行つて坂へ上る。

二、二尺ほど雪がつもつた。

三、この問題さへ知らないか。

四、花が美しいうへに香がよい。

五、東京から叔父と從妹がきた。

第十一章　句

第一節　附屬句

花咲く　は、完全なる文なり。されど、

花咲く春は長閑なり。　歌人は花の咲くを待つ。

花咲けども鳥鳴かず。　花咲き、鳥鳴く。

の如く用ひられたるときは、他の大なる文の一部分となりたるなり。かく、文がその獨立を失ひて、他の文の一部分となれるものを句といふ。

花咲く春は長閑なり。

風は木の葉の散りし梢を拂ふ。

華やかなりしあたりも人住まぬ野らとなる。

右の如き句は、下にある體言を形容するものなれば、これを形容句といふ。形容句は形容的修飾語となりて、主語・客語及び補語を修飾す。

花咲けども鳥鳴かず。　風吹けば燈火消ゆ。

今日は雨降るとも學校に行かむ。

右の如き句は、下にある用言を限定するものなれば、これを副詞句といふ。副詞句は副詞的修飾語となりて、述語を修飾す。

親の子を愛するは眞情なり。

君は親鳥の雛に餌を與ふるを見しか。

漁舟は點々として木の葉の散るに似たり。

右の如き句は、主語・客語又は補語として用ひられたるものにて、名詞と同一の用を爲すものなれば、これを名詞句といふ。

名詞句・形容句・副詞句は、共に他の文に附屬せるものなれば、これを附屬句と稱す。

第二節　獨立句

花咲き、鳥鳴く。

月落ち、烏鳴き、霜天に滿つ。

姉は師範學校を卒業し、妹は高等女學校に入學す。

以上の如き句も、一見附屬句の如く思はるれど、こは、元來二文又は三文なるべきを一文に結合したるものにて、その形こそ完全ならざれ、意義に於ては各獨立して、各句何れも輕重なし。かくの如く、主從の關係なく、各同等の價値を有する句を獨立句といふ。

獨立句は最後に置かれたる句の外は、多くは連用段にて中止するものとす。

次の文につきて句を指示し、且、その種類を示せ。

一、水清ければ大魚棲まず。

二、波の起るは風吹くによる。

三、壁間に牧童笛を吹く畫をかけたり。

四、渚こぐ船は波に漂ひ、道ゆく駒は足のたちどを惑はせり。

五、東風吹かばにほひおこせよ、梅の花、主人なしとて春な忘れそ。

第十二章　副詞句と接續助詞との關係

前章に說きたる如く、副詞句には　ば　ども　とも等の助詞の添へるを見るべし。此の外　が　に　を　て　つつ等の助詞も、亦、副詞句を作る用をなすものなり。

一、ば

花咲かば鳥鳴かむ。　花咲けば鳥鳴く。

夜おそくば行かじ。　夜遲ければ行かず。

右の如く　ば　は、用言の將然段につきて假定の條件を示し、又已然段につきて確定の條件を示して、其の條件に相應する意を下に表す。

二、とも　ども

花咲くとも鳥鳴くまじ。　量は少くとも價は高からむ。

花咲けど(ども)鳥鳴かず。　量は少けれども(ど)價は高し。

右の如く　とも　は、終止段につきて(形容詞に限り連用段に續く)假定の條件を示し、　ど　ども　は已然段につきて確定の條件を示して、其の條件に反對する意を下に表す。

【注意】1. とも は動詞・助動詞の終止段に連るものなれど、近來、今更悔ゆると

も　及ばじ　殺さるゝとも　厭はじ　讀ましむるともえ讀まざるべし

の如く、連體段に連用するに至れり。

2. とも　ども　の二は、近來、往々略して　も　とし、且、これを連體段に連ぬるに至れり。例へば、何等の理由あるも(アリトモ)教室に入るを許さず　期限は經過したるも(タレドモ)何等の通知なし　の如き是なり。されど、給金は低きも(クトモ、ケレドモ)應募者は多かるべしの如きは、誤解を生ずることあれば、よく注意すべし。

三、が　に　を

雨は止みしが風猶やまず。

試驗期日は近きに復習いまだ成らず。

少しの物陰もなきを如何なる處に隠れけむ。

右の　が　に　を　は、用言の連體段につきて確定の意を示し、上句に反對の意を下に表す語なり。(體言に連る　が　に　を　と混ぜぬやう注意すべし。)

四、て　つつ

雨降りて地かたまる。

雨にぬれつゝ花を折る。

て　は或事柄より他の事柄に移る意を示し、つつ　は二の事柄が並び起る意を示す。共に動詞の連用段に連る。

て　は又他の語と連結して　にて　とて　して　にして　ずて(又はで)　などと用ひらる。

以上述べたる助詞は、何れも上下の語句を接續する用を爲す故に接續助詞といふ。

第十三章　文の構成上の種類

(一)花咲く。
(二)花咲く春は長閑なり。
(三)花咲き、鳥鳴く。

以上三種の文を見るに、(一)は「花」といふ主語に對して、「咲く」といふ述語ありて、固より完全なる文なり。(二)は「花咲く」といふ附屬句を含める文なり。(三)は二個の獨立句より成れる文なり。かく、構造の異なるによりて文を分ちて、單文・複文・重文の三種とす。

第一節　單文

「花咲く」の如く、一個の述語より成りて、句を含まざる文を單文といふ。

紫式部は才と學と德とを兼ねたり。

父は財産を太郎・次郎・お花・お松に分けてやつた。

よく勉强する人は、將來、必ず名を天下に揚ぐべし。

右の如く、客語・補語及び修飾語(未成句の)をいかに多く重ぬとも、一個の述語よりなれるものは、皆單文なり。

西陣織と清水燒は、京都の名産である。

萩・桔梗・尾花・女郎花等は、秋の七草なり。

右は數個の主語あれども、述語は共通の一語なれば、尙單文なり。

東京は人口多し。

印度人は色が黑い。

彼は性質繪畫に適す。

右の如き文にて、人口は、主語にして、多し　黑い　適す　は、その述語なり。されど、東京　印度人　彼　は、全文の主語と見るを得べし。かく、主語と述語とを具備せる文の題目となるものを總主(又は文主)といふ。單文に總主の添へるものも亦單文なり。

第二節　複文

花咲く春は長閑なり　の如く、一文中に附屬句を含めるものを複文といふ。

親の子を愛するは眞情なり。

君は親鳥の雛に餌を與ふるを見たりや。

漁舟は點々として木の葉の散るに似たり。

木の葉の落ちる音が、雨の降るやうに聞える。

右の如く、主語・客語・補語及び修飾語の中、何れか句たるものは、すべて複文なり。

雨降りて、地かたまる。　雨が降ると、土地がかたまる。

花咲けども、鳥鳴かず。　花が咲いたが、鳥は鳴かない。

水清ければ、大魚棲まず。　水が清いから、大魚が居ない。

右の如きは、主從二句より成るものにて、主句は單純なる單文なれど、從句は主句に附屬せるものなり。換言すれば、從句は主句を修飾する副詞的修飾語たるに過ぎず。故に右の如き文も亦複文なり。

主句と從句との主語が同一なるときは、その一を省略す

るを常とす。例へば、

物盛なれば、(物)衰ふ。

私は病氣なれば、(私は)學校に出席せず。

の如し。從て文中の主語は一なれども、單文にあらずして複文なり。

又從句が主句に接續する場合に、接續上用語の制限あるを以て、句中の係詞に對して結詞なきことあり。これ複文に於て往々見る所なり。左の例を見よ。

我れぞ知りたれば、告げまゐらせむ。

都人さこそ待つとも、郭公同じ深山の友な忘れそ。

同じ心ならむ人とうらなく言ひ慰まむこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじ。

第三節　重文

花咲き、鳥鳴く　の如く、二個以上の獨立句より成れる文を重文といふ。

山高く、水清し。　兄は笛を吹き、妹は琴をひく。

月落ち、烏鳴き、霜天に滿つ。

の如く、重文の前句は、連用段の語にて中止し、最後の句のみ終止段を以て結ぶを常とす。こは、元來、別々の文を一文として續くるが故なり。

重盛は君に忠を致し、(重盛は)父に孝を竭す。

彼は書を好み、(彼は)畫を書き、(彼は)琴を彈き、(彼は)又裁縫をよくす。

の如く、獨立句の主語同一なるときは、後の句に於てこれを省略するを常とす。從て文中にある主語は一つなれども、尙重文なりとす。

單文・複文・重文の三種は、文の構成上より區別せるものなり。吾等の日常講讀する文章は、これらの諸文相合して複雜になれるものなり。左の例によりて、一斑を知るべし。

重文（形容句）
花咲き、鳥鳴く春は來りぬ。（複文）

重文（名詞句）　複文
月滿てば虧け物盛なれば衰ふるは世の常なり。（複文）

右の文章の構成上の種類を分て。

一、德を修め、智を磨く。（單文）

二、我は梟の鳴くを聞きたり。（複文）

三、梅の花が咲くと、鶯が來て鳴く。（複文）

四、西洋の櫻の花は、日本のほど美しくない。（單文）

五、水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友による。（單文）

六、よく勉强する人は、後にかならず名を揚ぐべし。（單文）

第十四章　文の性質上の種類と係結法

(一)花いまだ咲かず。　支那は日本より面積廣し。

(二)妹は居るか。　彼は歸れりや。

(三)先生の命を聞け。　朝は早く起きよ。

(四)あゝ、美し梅の花。　あはれ、今年も暮れなむとす。

以上例示したる四種の文を見るに、その意各異なり。(一)は事實をありのまゝに叙述したるものにて、これを叙述文

といひ、(二)は疑問の意を表す文にて、これを疑問文といひ、(三)は命令の意を表す文にて、これを命令文といひ、(四)は感動の意を表す文にて、これを感歎文といふ。

左の文章につきて、この四種を區別せよ。

一、能ある鷹は爪をかくす。

二、あはや、法皇の流されさせおはしますぞや。

三、己の欲せざる所は、人に施すことなかれ。

四、榮華に誇りし金殿玉樓、今いづくにかある。

五、よく勉強する人は、後に必ず令名を揚ぐべし。

第一節　叙述文

叙述文は文の最普通なるものにて、最多く用ひらるゝものなり。卽、

花咲かず。　彼は善人なり。

花ぞ咲かぬ。　彼こそ善人なれ。

の如し。この文の特質は左の如し。

(一)述語は終止段を以て結ぶを通例とす。

(二)上に　ぞ　なむ　の助詞あるときは、述語は連體段を以て結び、　こそ　の助詞あるときは、已然段を以て結ぶ。

茲に注意すべきは、すべて句を含める文にありては、句中にある係詞は、句の外に影響を及ぼさゞること是なり。例へば、

我こそは源氏の大將なれと呼ばはりけり。

肴こそなけれ。人はしづまりつらむ。さりぬべきものやあるといづくまでも索め給へ。

の如し。

第二節　疑問文

妹は居るか。　彼は歸れりや。

誰れかある。　春やおそき。

右の例の如きを疑問文と云ひ、その特質は左の如し。

(一)疑問文の述語は、や・か　の如き疑問の意を表す助詞にて結ぶ。而して　や　は用言の終止段にも連體段にも連り　か　は連體段のみに連る。

(二)や・か　の疑問助詞が、文の中にあるときは、述語は必ず連體段を以て結ぶ。

(三)や・か　の如き疑問助詞の代りに、何・誰・幾　等の疑問の語を用ふることあり。左の例を見よ。

これは何なるぞ。　汝は誰ぞ。　總數は幾何なるぞ。

雲のいづこに月やどるらむ。

疑問文の一種に反語の意を表すものあり。例へば、

我も亦劣らむや。　いかでかさる事を言はむ。

の如きは、疑問の意裏返りて、確定の意となりたるものなり。故に反語は、意味は疑問にあらねど、形式の同じきより疑問文の中に收む。反語は又　や　か　に感動詞の　は　も　を添へて、やは　やも　かは　かも　として用ふる事あり。但、やも　かも　の類は、現今、普通に使用せず。

第三節　命令文

よく先生の命を守れ。　朝は早く起きよ。

右の例の如きを命令文と云ひ、その特質は左の如し。

(一)命令文の述語は、命令段を以て結ぶ。

(二)指定助動詞の　べし　は、轉じて命令の意に用ふることあり。この場合は、叙述文の如く終止段にて結ぶ。例、

明日午前八時に出頭すべし。　朝は早く起くべし。

(三)復習を怠ることなかれ。　故郷人に心隔つな。　主人なしとて春な忘れそ。　の如く、ある動作を禁止するも亦命令文なり。この種の命令文は　な　な　そ　の如き禁止の意を表す助詞、又は　なかれ(なくありの命令段)を以て結ぶ。而して　な　そ　は、動詞の連用段をその間に挿入す。但、カ行變格・サ行變格に限り、將然段の語を入れて、なこそ　なせそ　といふを常とす。又、な　は終止段に連るものなれど、ラ行變格、及びこれと同一の活用の語に限り連體段に連る。有るな　の如き是なり。

(四)命令及び禁止は、ある者に對して行ふべきものにて、對手、卽、主語なかるべからず。然れども、特にこれを掲ぐるの要なき場合多きにより、命令文には主語を省略するを常とす。

第四節　感歎文

あゝ、盛なるかな女子の教育。

花の色は移りにけりな。

あはれ、今年の秋もいぬめり。

右の如く、感歎文はかならず感動詞を含む。されど、感動詞を含むものは、悉く感歎文にあらず。左の例を見よ。

いざ行かむ。　いで御消息きこえむ。

思ふ心の殘るらむかし。

右の　いざ　いで　の如きは、單に發語として用ふる感動詞にして、かし　は文の末にありて、語意を強むる性質のものなれば、何れも叙述文と見做す。

以上四種の文、各特質ありて區別するを得れど、實際上往往相混じて使用せらる。左の例によりて一斑を知るべし。

あゝ、これ失せにし友の愛せし花なるか。

友は、あはれ樂しき日なるかな、と繰返したり。

くれ〳〵も衞生に注意せよ、と父は命じ給ひぬ。

果してかゝることあらむか、女子教育のため憂ふべきの至なり。

第十五章　助詞の分類

從來、學びし助詞を意義と連續の法とにより、一括して表示すれば、左の如し。

體言に連る助詞	が　の　を　に　へ　と　より　から　まで（後置助詞）

用言に連る助詞	ば　とも　ど・ども　が・に・を　て つゝ（接續助詞）　なそ・な（禁止助詞）
種々の語に連る助詞	は・も　ぞ・なむ・こそ　し・のみ・ばかり だに・すら・さへ（指示助詞）　や・か（疑問助詞）

左の文中にある同形の助詞にして、意義・用法等の異なるものあらば説明すべし。

一、春雨の夜は靜なり。　春雨の降るは涙か。

二、梅の紅きが咲き出づ。　梅が香軒端にかをる。

三、飛行機空を飛ぶ。　某氏飛行機を製す。

白露の色は一つをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらむ。

四、姉は妹に國語を教ふ。　信玄謙信と河中島に戰ふ。

日暮れかゝるに宿るべき處遠し。

五、茶をば飲む。　茶を飲まばよからむ。

左の文中にある同形の語にして、意義・用法等の異なるものあらば説明せよ。

一、夜は更けぬ。　夜更けぬ中にかへるべし。

二、いつ頃植ゑ給ひしか。　昨日こそ早苗とりしか。

三、伯父は銀行の重役たり。　兄は中學校を卒業したり。

四、惡人に捕はる。　故郷の事のみ思はる。

五、勉强したり。　勉强せしにより。

勉强せざるにしもあらず。

六、かゝる事やある。　あなうれしや。

君は何處に行きたりや。

七、櫻花散らば散らなむ。人麿なむ歌の聖なりける。

いざ櫻我も散りなむ。

第十六章　文の解剖

文を個々の成分に分解するを文の解剖といふ。左に二三の文を分解して、その例を示すべし。

第一、隣家の少女、梅の花を折る。

(一)まづ、その主語と述語とを見るべし。この文の主語は少女にして、述語は折るなり。

(二)次に、主語・述語以外の主要成分(客語・補語)を見るべし。この文の述語たる折るは、他動詞なれば花といふ客語あり。

(三)次に、附屬成分(修飾語)を見るべし。隣家の少女に對する形容的修飾語にして、梅の花に對する形容的修飾語なり。は、主語は、客語

(四)次に、文の構成上の種類につきて考ふべし。この文は、一箇の述語より成りて、句をふくまざるを以て單文なりとす。

(五)次に、文の性質上の種類につきて考ふべし。この文は、疑問・命令及び感動の意味を表すものにはらず、單に事實をありのまゝに述べたるが故に叙述文なり。

隣家の（形、修飾語）少女（主語）（主部）　梅の（形、修飾語）花を（客語）　折る（述語）（述部）（單文）（叙述文）

第二、君は親鳥の雛に餌を與ふるを見たりや。

(一)この文の主語は　君は　にして、述語は　見たりや　なり。

(二)述語　見る　は他動詞なれば、これに要する客語は親鳥の雛に餌を與ふる　といふ名詞句なり。

(三)この名詞句の主語は　親鳥　にして、述語は　與ふる　なり。而して　與ふる　といふ他動詞に要する客語は　餌を　にして、雛に　は補語なり。

(四)この外には、附屬成分たる修飾語なし。

(五)この文は、唯一箇の述語より成れど、句を含める故に複文なり。

(六)この文は、性質よりいへば、見たりや　といふ疑問の意を示す故に疑問文なり。

主部：君は（主語）
述部：親鳥の（主語）雛に（補語）餌を（客語）與ふるを（述語）見たりや（述語）
客部（名詞句）

（複文）（疑問文）

第三、峻しき山は頭上より起り、涼しき風は脚下に生ず。

(一)この文は、山　といふ主語に對して、起り　の述語あり。風　といふ主語に對して、生ず　の述語あり。二つの句、各獨立せり。

(二)起り　生ず　は、共に自動詞なれば、もとより客語を要

せず。又補語もなし。

(三)峻しき　涼しき　は、主語たる　山　風　を修飾する形容的修飾語なり。　起る　の述語には、　頭上より　といふ副詞的修飾語あり。　生ず　の述語には、　脚下に　といふ副詞的修飾語あり。

(四)この文は、二箇の獨立句より成れるが故に重文なり。

(五)この文の性質は、叙述體のものなり。

峻しき（形、修飾語）　山は（主語）（主部）
頭上より（副、修飾語）　起り（述語）（述部）
涼しき（形、修飾語）　風は（主語）（主部）
脚下に（副、修飾語）　生ず（述語）（述部）
（重文）（叙述文）

次の文章を以上の例によりて解剖せよ。

一、かしこに學校あり。

二、母、娘に衣服を縫はしむ。

三、雨が降つたけれども、風は吹かなかつた。

四、彼は花の咲きたる枝を折りたり。

五、水は方圓の器に隨ひ、人は善惡の友による。

女子教科

國文法教本下卷終

女子教科

國文法教本下卷終

助動詞活用表

	將然段	連用段	終止段	連體段	已然段	命令段
所相	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
使役相	せ	せ	す	する	すれ	せよ
	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
過去	て	て	つ	つる	つれ	てよ
	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	たら	たり	たり	たる	たれ	
	ら	り	り	る	れ	
	○	○	き	し	しか	
	○	○	けり	ける	けれ	
未來	○	○	む	むる	め	
	なら	なり	なり	なる	なれ	

	將然段	連用段	終止段	連體段	已然段	命令段
所相	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
使役相	せ	せ	す	する	すれ	せよ
	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
過去	て	て	つ	つる	つれ	てよ
	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
	たら	たり	たり	たる	たれ	
	ら	り	り	る	れ	
	○	○	き	し	しか	
	○	○	けり	ける	けれ	
未來	○	○	む	む	め	
指定	なら	なり	なり	なる	なれ	
	たら	たり	たり	たる	たれ	
推量	○	○	らむ	らむ	らめ	
	○	○	けむ	けむ	けめ	
	べく	べく	べし	べき・	べけれ	
	○	○	まし	まし	ましか	
	○	○	らし	らし	らし	
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ	
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね	
	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	
	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	
	○	○	じ	じ	じ	
詠嘆	○	○	なり	なる	なれ	
比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	

口語助動詞活用表

		將然段	連用段	終止段	連體段	已然段	命令段
所相	嚙ま	れ	れ	れる	れる	れれ	れ（ろいよ）
	譽め	られ	られ	られる	られる	られれ	られ（ろいよ）
使役相	嚙ま	せ	せ	せる	せる	せれ	せ（ろいよ）
	譽め	させ	させ	させる	させる	させれ	させ（ろいよ）
過去	起き	たら	たり	た	た	たら たれ	○
未來	讀ま	○	○	う	○	○	○
	起き	○	○	よう	○	○	○
推量	讀ま	○	○	う	○	○	○
	起き	○	○	よう	○	○	○
	起きる	らしく	らしく	らしい	らしい	○	○
指定	讀む(の)	でせ	でし で	です	○	○	○
	動物	だら	だつ で	だ	○	○	○
	讀ま	○	なく	ない	ない	なけれ	○

口語助動詞活用表

		將然段	連用段	終止段	連體段	已然段	命令段
所相	嚙ま	れ	れ	れる	れる	れれ	れ（ろいよ）
	譽め	られ	られ	られる	られる	られれ	られ（ろいよ）
使役相	嚙ま	せ	せ	せる	せる	せれ	せ（ろいよ）
	譽め	させ	させ	させる	させる	させれ	させ（ろいよ）
過去	起き	たら	たり	た	た	たら たれ	○
未來	讀ま	○	○	う	○	○	○
	起き	○	○	よう	○	○	○
推量	讀ま	○	○	う	○	○	○
	起き	○	○	よう	○	○	○
	起きる	らしく	らしく	らしい	らしい	○	○
指定	讀む(の)	でせ	でしで だつで	です	○	○	○
	動物	だら		だ	○	○	○
打消	讀ま	○	なく	ない	ない	なけれ	○
	讀ま	○	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○
	讀む	○	○	まい	○	○	○
希望	讀み	たく	たく	たい	たい	たけれ	○

大正元年八月十五日印刷
大正元年八月二十日發行
大正元年十二月八日訂正印刷
大正元年十二月十一日訂正發行

女子教科 國文法教本上、下卷
定價各金拾八錢

不許複製

著者 西岡嘉藏

東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者 三樹一平

東京市本所區番場町四番地
印刷者 朝岡平藏

東京市本所區番場町四番地
印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市神田區錦町一丁目
〔電話長本局二四三八番〕
明治書院
振替口座東京四九九一番

本科第四學年

矢田又三郎